

□海外文献紹介□

ラットの実験における胃断端癌の
成因

The aetiology of gastric stump carcinoma in the rat: *Mason R, Filipe I* (Scand J Gastroent 25: 961-965, 1990)

著者らはラットの胃断端癌の発生に十二指腸液の逆流が関与していることを既に報告しているが、膵液の逆流が重要か十二指腸液の逆流が重要かを確かめる目的で、オス 250 g Wistar 系ラットを用いて以下の実験を行った。

方法: ①コントロール群(一部胃瘻造設), ②十二指腸全内容逆流(CR 群), ③胆汁のみ逆流(BR 群), ④膵液十二指腸液逆流(PDR 群), ⑤十二指腸液のみ逆流(DR 群), ⑥胃空腸吻合(GJ 群), および GJ 群の一部には更に幹迷切を加えたものを加えた。吻合には 5/0 Ethibond を

用い、通常の食餌で 9 か月間飼育した後屠殺して、胃内容液の総胆汁酸濃度, pH, 細菌叢を調べ、胃組織は HE 染色して、腺癌, dysplasia, adenocystic proliferation, 腸上皮化生, 正常に分類した。U-test および χ^2 検定により $p < 0.05$ を有意とした。

結果: 胃内総胆汁酸濃度は胆汁の逆流が起こる群で有意に高く各群で目的とする逆流が生じていることが確かめられた。腺癌は PDR 群 10/14, CR 群 7/12 にみられ、他の群に比較して有意に癌発生が高かった。また前庭部切除をした群で GJ 群より腺癌の発生が多かった(9/14 vs 4/24)。幹迷切の有無による差はなかった adenocystic proliferation は全群でコントロール群に比して有意に多くみられた。dysplasia は GJ 群においてのみ、コントロール群より有意に多くみられた。

全群を通して腺癌が発生した胃と発生しなかった胃について、腸上皮化生, adenocystic proliferation, dysplasia の頻度を比較すると、dysplasia のみが発癌胃に多くみられた。胃内 pH, 胃内総胆汁酸濃度, 細菌叢には差がなかった。

考按: 本実験により、発癌物質を投与することなく十二指腸液の逆流のみでラットに胃癌を発生させることを再確認し、逆流液中に膵外分泌液が含まれることが必要であることがわかった。

(抄訳者注 組織所見が示されていないのが残念であるが、発癌物質を投与することなく、膵液のみで 9 か月の短期間に高頻度にラットの胃に腺癌が発生したのは驚きである。)(関東通信病院消化器内科

萩原千恵子 抄)